半七雑感

国枝史郎

青空文庫

一

岡本綺堂氏の「半七捕物帳」その主人公の半七に就いて些私見を述べることにする。

「……三十二三の痩ぎすの男で、縞の着物に縞の羽織を着て誰の眼にも生地の堅気とみえる町人風であった。色の浅黒い鼻の高い、芸人か何ぞのように表情に富んだ眼を有っているのが、彼の細長い顔の著るしい特徴であった」

働き盛りの半七といえば、こんなような風貌を持ってたらしい。

「しかしこんな稼業の者にはめずらしい正直な淡泊した江戸児風の男で、御用を嵩に着て弱い者を虐めるなどという悪い噂は曾て聞いたことがなかった。彼は誰に対しても親切な男であった」

こういう性質の男であった。いかにも小説の主人公らしい洒落れていて敏感で親切で、うっかりすると毒婦などには、思い込まれそうな岡っ引なのであった。

最初に手柄を現わしたのは、彼の十九歳の時であった。「石燈籠」と云われる所の、殺人、強盗、誘拐事件で、最初の好運に見舞われた。雪を冠いた石燈籠の笠に、うっすり付いていた足跡に由って犯人の素性を知ったのであった。だが何うも此発見、少々眉唾物である。ひどくバタの匂いがする。西洋流の探索である。はは ア偖は神田の半七、ドイルの探偵物でも読んだかな？　などと疑問点を打ち度くなる。だが十九歳の初働きだ。そうそう突っ込むにも及ぶまい。

彼の際立った特色は、「見込み」で人をショピかないことだ。あくまで証拠で押して行くことだ。これが名岡っ引の所以である。

彼は洵に細い物品から、探索の糸口を発見する。「お化師匠」の事件では、穏しい「蛇」によって手蔓を得「筆屋の娘」の事件では、一本の「筆」によって手蔓を得又「少年少女の死」の、その上の部の事件では、「手拭」一筋から手蔓を得た。

わけても上の部の事件では、鮮かな手並を現わしている。踊子が一人殺された。手拭が一筋落ちている。それに鉄漿の跡がある。で半七は断定した。「鉄漿をつけた或る女が、手拭の端を口で銜わえ、それで子供を絞殺したのだ」――で見物の女達を一人一人物色する。果然犯人は目付かったのである。僅々数時間で目付けたのである。

「帯取の池」の事件では、彼は犯人の居り場所を食物によって発見した。或る場末の女師匠が、犯人を自分の家へ隠していた。うすうす感付いては居乍らも、どうも証拠が目付からない。そこで下っ引の松吉に命じて、師匠の食物を調べさせる。その結果確実に知ったのであった。

「野郎は師匠の家に隠れているんだ。あたりめえよ。いくら新宿を傍に控えているからと云って、今時の場末の稽古師匠が毎日店屋物を取ったり、刺身を食ったり、そんな贅沢が出来る筈がねえ。可愛い男が忍ばしてあるから、巾着の底を掃いて精々のご馳走をしているんだ」――そこで師匠の家へ行き、戸棚から犯人を引き出すのであった。これは如何にも日本的で、そうして充分合理的である。

大方の岡っ引は功に焦り、努めて罪人を出そうとする。然るに半七はそうで無かった。彼には血もあれば涙もあった。彼は好個の紳士なのであった。この点ホルムスと似通っている。「勘平の死」の事件では、わざと犯人を自滅させ、和泉屋という大老舗に、成るべく迷惑をかけないようにした。「帯取の池」の事件でも、これを表

向きにする時は、千次郎という若者は、お叱りの上町預け、これ位いの罪にはなるのであったがさっさっと見遁して了うのであった。だから時々犯人などから、お礼の言葉を受けることがあった。

二

半七と雖も悩喝はした。高飛車に出て嚇すことがあった。

「……それで世の中が無事息災に通って行かれりゃア、闇夜にぶら提灯は要らねえ理窟だが、どうも然うばかりは行かねえ。さあ、恐れ入って真直になんでも吐き出してしまえ。ええ、おこついているな。脂を嘗めさせられた蛇のように往生際が悪いと、もうお慈悲をかけちゃあいられねえ。さあ。申立てろ。江戸中の黄蘗を一度に舐ぶらせられた訳でもあるめえし、口の利かれねえ筈はねえ。飯を食う時のように大きい口をあいて物を云え。野郎、判ったか。悪く片附けていやあがると引殴くぞ」

などと勇敢にやっつけるのであった。

そうして後で夫れに就いてこう弁解をしているのであった。

「今と違って、むかしの番屋の調べはみんなこんな調子でしたよ。町奉行所は格別、番屋で調べる時には岡っ引や手先ばかりでなく、八丁堀の旦那衆もみんなこの息で頭からポンポン退治付けるんです。芝居や講釈のようなもんじゃありませんよ、ぐずぐずしていりゃあ、ほんとに引殴くんですよ」

その俳優のように表情に富んだ神田の半七の大きな眼が、そういう場合如何に鋭く、どんなに威圧的に輝くことか、想像すると面白いでは無いか。しかもそういう悩喝にさえ、「脂を嘗めさせられた蛇」だとか「江戸中の黄蘗を舐らせられた」とか、詩的な形容詞が飛び出すのである。半七は芸術的探偵なのである。

彼には幾人か手先があった。間違いや出鱈目を報告するので、法螺熊という異名のある、ヤクザの手先もあることはあったが、松吉という手先などは優秀な腕を持っている。自分で大体見当を付け、先ず手先をして探らせる。それから自分が出掛けて行き、最後の仕上げをするというのが、半七の常套手段である。で彼は勿論自分自身が、立派な探偵であると共に、聡明な親分でもあるのである。時によっては肉身の妹で、常盤津師匠の文字房をさえ、下っ引として使うことがある。だが何うやら妻君にだけは、一切容喙させないらしい。

「やかましい。御用のことに口を出すな」

などとキメ付けることさえある。

半七と雖も神では無い。時によっては失敗もした。「湯屋の二階」の事件などは、その著しい例であった。正月二日から遊んでいる得体の知れない二人の武士、その持物を調べて見ると、干からびた人間の首が出る。時は文久年間で、世間が何んとなく騒がしい。かてて加えて強盗事件がある。どうでも怪しいと目星を付け、十手を突きつけて訊問して見るとどっこい大宛違いなのであった。友の敵討ちの助太刀を、殿から命ぜられた武士達なので、正月二日から遊び歩いているのは、敵を捜しているのであり、不思議な人間の首というのは、一人の武士の家の宝で、今日謂う所の木乃伊なのであった。

「今でこそお話をすれ、その時には私も引込がつきませんでしたよ。なまじ十手を振廻したり何かしただけに猶々始末がつきませんや。でも、その梶井という武士も案外捌けた人で一緒に笑ってくれまし

たから、まあ、まあ、どうにか結末（おきまり）は付きましたよ」

こう云って半七は苦笑しているが、いかにも是（これ）は尤（もっと）である。

×

半七は名探偵、これには何んの異存も無い。チョン髷時代の岡っ引としては、もうもう充分科学的でもある。最も大切な直感力さえある。人柄から云っても好もしい。

まるで実在の人物のようだ。ふと人混（ひとごみ）など歩く時、僕は時々思うことさえある。

――唐桟の羽織を引っかけた、色の浅黒い半七が、じっと獲物へ眼を付け乍ら雑踏の巷を押し分け押し分け、その辺を歩いてはいまいかと！　朱総の十手さえ眼にちらつく。

自由自在天衣無縫、岡本綺堂氏の話術の冴は、いや七十歳の半七の、円滑を極わめた話術の冴は、そう迄（まで）神田の半七を写し出しているのである。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集　全一巻」作品社
　　2005（平成17）年9月15日第1刷発行
底本の親本：「新青年　新春増刊号」
　　1926（大正15）年2月
初出：「新青年　新春増刊号」
　　1926（大正15）年2月
入力：門田裕志
校正：きゅうり
2018年9月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七雑感

国枝史郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/